

# 2022 年度 教育・研究年報

# 目 次

## 教育・研究年報

### 【学部】

● 一般教養	1
● 基礎看護学	3
● 成人看護学	4
● 老年看護学	7
● 母性看護学	8
● 小児看護学	9
● 精神看護学	10
● 公衆衛生看護学	12
● 在宅看護学	14

### 【大学院】

● 令和4（2022）年度大学院科目一覧	16
● 共通科目	17
● 基礎・地域連携看護学	20
● 臨床・応用看護学	22
● 看護管理学	24
● 研究科目	26

## 個人ごと業績（著書、論文、学会発表、その他）

### 【学部】

清水 哲郎	28
相澤 出	28
大井 慈郎	29
長谷川 幹子	29
作間 弘美	30
野中みつ子	30
武田 恵理子	30

千田 真太郎	31
土田 幸子	31
佐藤 大介	31
勝野 とわ子	32
吹田 夕起子	32
齋藤 史枝	32
赤石 美幸	32
江守 陽子	33
大谷 良子	33
佐藤 恵	34
濱中 喜代	34
下野 純平	35
秋本 和宏	35
遠藤 麻子	35
岡田 実	36
鈴木 るり子	36
大沼 由香	36
加藤 美幸	37
太田 ゆきの	38

## 【大学院】

伊藤 收	39
------	----

## 外部資金獲得状況

● 外部資金獲得状況一覧	41
--------------	----

## 令和4(2022)年度 一般教養領域活動報告

### 1. 領域構成

清水哲郎(教授)、相澤出(准教授)、大井慈郎(講師)

### 2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

清水教授は学部では、「ケア・スピリット論Ⅰ」(1年次)、「基礎ゼミナール」(1年次)、「看護倫理」(2年次、濱中教授、石井准教授と共同)、「人間の生と死」(2年次)、「エンドオブライフケア論」(3年次、濱中教授、石井准教授と共同)、「臨床倫理」(4年次、濱中教授と共同)を担当した。前年度末に刊行したこれらの科目に共通のテキストともなる書籍を使った授業を実施した。

相澤准教授は新カリキュラム1年次科目「基礎ゼミナール」「社会と福祉」、旧カリキュラム2年次科目「家族という社会」「チーム医療論」、3年次科目「社会と福祉」を科目責任者として担当した。さらに「保健医療福祉連携論」の分担者を務めた。4年次「卒業研究ゼミナール」では3人の学生の研究指導を行った。この他、1年生を対象とした課外教育(後期実施)である初年次教育の「国語(現代文)」も担当した。

大井講師は「情報リテラシー」(1年次)、「調査と統計」(3年次)、「看護研究方法論」(3年次、勝野教授と共同)を担当した。「情報リテラシー」は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度も新型コロナの状況変化に対応するためにビデオチャットに関する説明も取り入れた。「調査と統計」と「看護研究方法論」については、量的研究に関する範囲を同じ教員が担当することにより、2つの授業を関連させながら展開することができた。

### 3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(B)(課題番号22H00602)初年度の研究活動および本学臨床倫理研究センターの活動を併せ行った。1)高齢者ケアの中でも認知症者の意思決定支援について、老いによる弱さの進行一般と併せ考えられるようにすることを目指した。2)臨床倫理研究センター懇話会(オンライン開催6回)、公開講座、学会講演、医療・看護関係の研修等にて研究成果の発表および臨床現場への還元を行った。

相澤准教授は地域包括ケア、在宅医療、介護福祉の研究を継続して進めた。新型コロナウイルスの感染状況の影響に加えて、学内業務の例年以上の多忙もあり、今年度は研究が滞った。それでも秋田県、宮城県内の特別養護老人ホーム、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーションなどを対象として、地域連携・他職種連携に着目して調査を継続的に実施した。加えて在宅療養支援診療所と特別養護老人ホームとの共同研究、自立支援相談センターやNPOの地域活動の調査を実施した。これらの研究は、科学研究費助成事業 基盤研究(B)(22H00602、研究代表者:清水哲郎)、基盤研究(C)(22K11176、研究代表者 遠藤和子)を受けて行われた。

大井講師は大きく、4つの研究を実施した。第一に、科学研究費助成事業基盤研究(B)(課題番号16H03319 代表者:内藤耕)の成果を共同研究者とともに学術書として出版した。第二に、岩手県盛岡市緑が丘地区の高齢者支援活動の調査より、コロナ禍のボランテ

ィアに着目し、活動継続の難しさと存続のための要件を分析した。第三に、学内共同研究として、実習時の学生のストレス変化の計測に取り組んだ。第四に、学内の助産師・保健師資格をもつ教員たちとともに、岩手県内の分娩施設の減少について地理学の観点から分析を行った。

## 令和 4 (2022) 年度 基礎看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

長谷川幹子（教授）、作間弘美（講師）、野中みつ子（助教）、山田英子（特任助教）  
武田恵梨子（助手）、千田真太郎（助手）

### 2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

基礎看護学領域が関わる科目として、1年次科目の「看護学概論」、「看護理論」、「基礎看護援助論」、「ヘルスアセスメント」、「生活援助技術論」を開講した。2年次科目では、「療養援助技術論」が開講された。4年次科目の「総合実習（学生12人）」はメンバー全員で担当し、「卒業研究ゼミナール（学生10人）」では、長谷川教授、作間講師、野中助教で分担・共同して指導にあたった。講義や演習においては、学生のレディネスを把握しながら、グループディスカッションやグループワークによる調べ学習、反転授業の方略を用いたアクティブ・ラーニング型を多く取り入れた。

実習科目においては、1年次を対象とした「生活援助実習」は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学内代替実習へ切り替えたが、臨床実習に近い形態になるよう工夫した。結果、学生の満足度は高く、学生全員が実習目標を達成することができた。

基礎看護学領域で担当した各科目の授業評価アンケート結果は全体的に高評価であり、「教員の意欲」に関する項目は最高点（4.0）を認める科目もみられた。また、自由記述からは看護技術の知識を学び体験することによる看護学生としての意識の高まりや、看護師としてのあり方について学びが大きかったことがうかがえた。

関連科目の「早期体験実習」は科目責任者を長谷川教授が担い、作間講師がサポートに徹した。また、「看護過程論」では野中助教と千田助手が、「療養援助実習Ⅰ」と「療養援助実習Ⅱ」では野中助教、山田特任助教、武田助手、千田助手が学生指導にあたった。

### 3. 基礎看護学領域における研究に関する内容と評価

基礎看護学領域として取り組んでいる学内共同研究：「COVID-19の影響により臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感についての実態調査」は調査結果をまとめて第42回日本看護科学学会学術集会において口演発表した。また、「看護技術習得のための自己調整学習方略の検討ー生活援助技術演習振り返り用紙の結果期待と目標意図・実行意図の項目別変化よりー」については、日本看護研究学会第48回学術集会において口演発表した。これらについては論文としてまとめ、学術雑誌に投稿する予定である。さらに、長谷川教授と作間講師が他大学教員との共同研究で取り組んだ「看護学生の死生観」に関する研究は、論文としてまとめたものを学会誌に投稿中である。加えて、武田助手が岩手保健医療大学大学院において、令和5（2023）年3月に修士（看護学）を取得した（修論テーマ：「高校生の性と生殖の健康に関する知識の実態とその関連要因」）。

次年度こそ、教育活動や委員会活動などに偏重することなく、研究活動にも力を注いでいきたい。

## 令和4(2022)年度 成人看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

土田幸子（教授）、石井真紀子（准教授）、吉岡智大（助教）、添田咲美（助教）、佐藤大介（助手）、小笠原千恵（助手）

### 2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

令和4(2022)年度に領域の教員が担当した科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣

看護論、慢性期看護技術論、急性期看護技術論、がん看護論、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、看護過程論、看護管理論、看護教育論、卒業研究ゼミナール、総合実習、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、生涯発達論、エンドオブライフケア論、救急看護論の22科目であった。

#### 1) 専門科目について

##### (1) 講義・演習について

4年次は領域全員で卒業研究ゼミナール(11人)、総合実習(13人)を担当した。卒業研究ゼミナールでは、終末期看護・手術患者への看護、患者教育等のテーマで研究計画書を作成し発表会を開催し、3年生の参加も得られた。「総合実習」は各自の目標をもとに終末期看護、急性期患者の看護、慢性期患者の看護、手術室看護に分かれ実施した。さらに、「看護教育論」を石井がオムニバス形式で担当し、教育とは何か、自分たちが学んでいる看護教育におけるカリキュラム構成の考えかたなど看護教育の全体について教授した。「看護管理論」を土田が担当し、看護管理は病棟師長が行うものという認識を払拭することができた。

3年次は、前期に「慢性期看護技術論」、「がん看護論」、後期に「急性期看護技術論」を担当し、それぞれの看護の特徴に焦点を当て展開した。特に、3年次の臨地実習にスムーズに連動できるよう臨床場面を想定して学内演習を実施した。1つの場面の成り行きまでを考慮してアセスメントができるよう計画し、生活援助技術を組み入れ基本技術の復習と健康障害のある対象の理解が深められるよう配慮した。後期には「エンドオブライフケア論」をオムニバス形式で石井が担当し、人間の生を全うするための援助について教授した。

2年前期の「成人看護援助論」では、健康障害を有する対象への援助技術の習得に焦点を当て、成人期に多くみられる疾患と、主な検査と治療を教授した。2年後期の「生活習慣看護論」では、生活習慣と疾病の関連を理解し、成人期における人々の疾病予防と生活習慣の改善の重要性について考えることができていた。また、糖尿病患者のセルフアセスメントとして自己血糖測定、インスリン自己注射については講義で実際に使用する器具を手にとって使用方法を理解させた。演習では、自己血糖測定、インスリン自己注射を各自で作成した手順をもとに実施した。実施では、ペアの学生が評価者となって評価し、修正を行っていた。フットアセスメントでは、既修のフィジカルアセスメントの復習とタッチテストを行い、フットケアの必要性を再認識させることができた。

今年度の1年後期の「成人看護学概論」では、成人期の特徴、成人看護の意義から教授し、成人期の健康問題として日常生活習慣や職業等に関連する疾患について各自が関心を

持つ疾患を選択し個人ワークさせた。その後関連疾患グループを編成しグループワークへと発展させ、成果を発表させた。その結果、疾患を理解するための方策が身につき、生活や生活習慣と疾病の関連の理解につながられた。「看護倫理」を石井が科目責任者として担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。また、倫理的意思決定の事例検討を展開し、個人学習やグループワークを支援し、発表の機会を設け成果を共有することで学修を深めた。

## (2) 実習科目について

今年度担当したのは、早期体験実習・生活援助実習・療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱであった。

1年生の早期体験実習は石井・添田・佐藤・吉岡・小笠原が担当し、生活援助実習は吉岡・小笠原が担当した。生活援助実習は代替実習となり、科目責任領域（基礎看護学）から要項が示され、学内で代替実習を実施した。

2年生の療養援助実習Ⅰは、COVID-19感染対策として複数の病院から実習受け入れ中止となったことから全体を2つのグループに分け、代替実習を実施した。教員が複数の模擬患者の事例を作成し、全グループが異なる事例で看護過程を展開し、立案した看護計画をもとに具体策を模擬患者に実践した。実施後は、模擬患者を交えて振り返り感想や意見をもとにiPadで記録したものと併せてグループ全員で振り返り修正につなげた。初めて学生以外の対象に看護を実践し、これまでにない緊張感をもって実施することができ、模擬患者役からの感想に自己を振り返り涙する学生もいた。

3年生には前期「成人看護学実習Ⅰ」、後期「成人看護学実習Ⅱ」を領域内全教員と非常勤実習指導者3人で担当した。成人看護学実習Ⅰは、全期間臨地で実習することができ、これまでの臨地実習よりも看護度の高い患者を受持ち、看護の基本技術の向上と個別性のある看護の実践に重点をおいた。成人看護学実習Ⅱでは、手術見学出来た学生もいたが、急性期にある患者を受けもち変化に対応した看護の実践を展開した。ほとんどの学生が積極性を発揮し、受持ち患者と良好な関係を築き、個別性のある看護を展開していた。令和5年1月の2クールでCOVID-19感染拡大に伴い代替実習となったグループがあった。しかし、1クールで実習病院との誓約事項に反し、濃厚接触者になった学生が2人あり、誓約遵守事項については各クール開始前にメールし、注意喚起を行った。

4年生の総合実習は13人を担当し、終末期看護・急性期看護・慢性期看護・手術室看護それぞれ各自のテーマに沿って実習病院を決定した。終末期看護では緩和ケア病棟で実施し、病院側から提示されたスケジュールをもとに週間予定をたて、受持ち患者とじっくり向き合い個別性のある看護を考えられるようになっていた。しかし、患者の想いに寄り添えないまま実習が終了し、面接でその状況を想起させ患者の想いに気づくことができた学生もいた。周術期看護では、今年度は県立中部病院の急性期病棟での実習が実施でき、一連の周術期看護を展開することができた。手術室看護では、規模の異なる2病院で実施し、それぞれの病院の役割機能を学ぶこともできた。慢性期看護においては、積極的に基本技術の確実な修得に向けた取り組みをし、病棟スタッフからとても良い評価を得られていた。

## 2) 基礎科目について

今年度は、基礎ゼミナールで石井がグループ担当となり、前期後半から後期にかけて、



グループでテーマを決め、達成目標を設定し、次回までの目標を決め積極的に取り組んだ。グループワークでは文献検索とその活用、グループ討議のあり方を学び、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための支援を行った。

さらに、石井が「生涯発達論」をオムニバスで担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へと連動できていたと考える。

### **3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価**

学内プロジェクト研究「看護学生の実習期間中におけるストレスの実態調査」に吉岡、添田、佐藤、石井が今年度より取り組み、学内研究報告会で成果の一部を発表した。

個人研究では、土田と佐藤がそれぞれ学会発表を1演題行った。

## 令和4(2022)年度 老年看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

勝野とわ子（教授）、吹田夕起子（教授）（9月から）、齋藤史枝（助教）、赤石美幸（助手）

### 2. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

#### 1) 老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1年次後期に開講した。授業内容の工夫点としては、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、高齢者へのインタビューを通し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。「老年看護援助論」は、2年次前期に開講し、ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、赤石助手もこの演習指導に加わった。学生の取り組みの姿勢および達成度も良好であった。「老年看護技術論」は、2年次後期に開講し、感染管理を徹底しながら、技術演習を通してヘルスアセスメント技術や生活援助技術など実践に即した方法が修得できるよう授業展開の工夫を行った。「卒業研究ゼミナール」は4年生5人を指導し、文献研究2本、研究計画書3本の卒業研究論文を完成させた。

「老年看護学実習」は3年次に実施したが、コロナ禍のため、学内実習と臨地実習を組み合わせることで個々の学生が可能な限り実習目標を達成できるよう工夫した。また、7人の学生には2月から3月に追実習を学内で実施した。実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を提供した。また、個々の学生の能力差に配慮し最適な環境下で実習できるように事前に学生面接を行い、実習施設と調整した。学生の実習に対する満足度は高く、実習施設からの評価も高かった。「総合実習」は4年生8人に実施した。学生の満足度、実習目標の達成度および実習施設からの評価も高かった。

#### 2) 看護専門科目、統合科目、その他の臨地実習

1年次の「生涯発達論」、「基礎ゼミナール」、2年次の「看護過程論」、3年次の「看護研究方法論」を領域教員が担当した。また、実習科目では、1年次の「早期体験実習」、2年次の「療養援助実習Ⅰ」を領域教員が担当した。さらに、2年次の「療養援助実習Ⅱ」については、学内および実習施設との調整を行うとともに実習指導の要として機能した。ほとんどの学生の取り組みの姿勢はよく、学生の達成度は高かった。

### 2. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

本年度は、齋藤史枝助教が中心となり学内共同研究「介護老人保健施設における出前講義型急変時対応シミュレーショントレーニングプログラムの検討」を申請し採択された。3月の学内研究成果発表会で「介護老人保健施設職員の急変時の感染対策を含めた対応の実態とシミュレーショントレーニングプログラムの検討」（筆頭者：齋藤史枝）について成果発表した。若手の教員の研究力が伸びつつあるので引き続き領域内で協力しつつ研究成果を上げられるよう取り組むことが必要である。

## 令和 4 (2022) 年度 母性看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（准教授）、佐藤恵（助教）

### 2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

母性看護学領域が主担当となる科目として、新カリキュラムによる 1 年次学生の「母性看護学概論（後期）」（江守）、2 年次科目の「母性看護学概論（前期）」（江守）、「母性看護援助論」（大谷・佐藤恵）、3 年次科目の「母性看護技術論」（江守・大谷・佐藤恵）、「母性看護学実習」（江守・大谷・佐藤恵）、「セクシャルヘルス・アセスメント（選択科目）」（江守）、4 年次科目の「総合実習（母性看護学領域）（8 人）」（江守・大谷・佐藤恵）、「卒業研究ゼミナール（10 人）」（江守・大谷・佐藤恵）を開講した。講義・演習・実習ともに基本的な母性看護学の知識・技術の着実な習得を目指し、学生が興味を持って自ら学ぶ意欲を高められるような教授法を日々工夫している。残念ながら、成績の良くなかった学生には再試験をし、再学習の機会を与え、それでも成績不振の学生には、個別に課題を与え、単元の確実な修得を促している。

本年度は、コロナ感染症の影響で母性看護学の領域別実習のうち、16 グループ中の 5 グループが一部または全部の病院実習ができず、学内実習あるいは自宅学習に振り替えざるを得なかった。

大学院では 1 人の修士の学生が論文を完成させ修了することができた。

母性看護学領域の教員は 3 人であるが、実習施設が遠方であることや複数個所に分かれて実習していることから、助手あるいは非常勤の実習助手の確保が望まれる。

### 3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

佐藤恵助教、大谷准教授、江守教授は、「新型コロナウイルス感染症パンデミック時の岩手県内産科医療施設における感染症対策および妊産婦ケアの実態」を日本助産学会誌 36(1) に掲載した。

ほかに、佐藤恵助教、大谷准教授、江守教授は、共同研究として、令和 4 (2022) 年 3 月に第 36 回日本助産学会学術集会(Web 学会)で、「卵子提供をうけ出産に至った女性の体験」について、口頭発表を行った。令和 4 (2022) 年 4 月には、25th EAFONS (2022) Virtual via Zoom Webinar において、「Experiences of women giving birth during the COVID-19 pandemic in Japan」について、ポスター発表を行った。

次年度以降も母性看護学領域として、研究活動を発展・充実させ、微力ながらも社会に貢献できるような成果を発出していきたい。

## 令和 4 (2022) 年度 小児看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

濱中喜代（教授）、下野純平（准教授）、秋本和宏（助教）、遠藤麻子（助手）

### 2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

濱中教授は令和 4 (2022) 年度新カリキュラムにおいて、関連科目の「生涯発達論」を科目責任者として担当した。例年同様に発達理論、小児の発達段階、各期の特徴について概説した。その学びを踏まえて、1 年後期に「小児看護学概論」を展開し、小児看護学の在り方について教授した。旧カリキュラムでは 2 年生前期に同じく「小児看護学概論」を教授した。他に「看護倫理」「看護教育論」を担当した。後期の「家族看護論」は科目責任者として家族看護学の基礎について教授した。また 3 年前期の「エンドオブライフケア論」を担当した。さらに清水教授と 4 年後期の「臨床倫理」を担当し、倫理的ジレンマ、ケア・スピリット等について実習体験の振り返りを基に展開し成果を得た。

下野准教授は科目責任者として旧カリキュラム 2 年後期の「小児看護援助論」を担当し、小児の看護援助方法及び看護過程について教授した。また 3 年前期の「小児看護技術論」では実習前に必要な技術について、科目責任者として、演習中心に秋本助教、遠藤助手とともに展開した。卒研ゼミナールにおいては 6 人の学生を指導し、確実な成果を得た。また 3 年通年の「小児看護学実習」を科目責任者として、4 年後期の「総合実習」を小児看護学の統括として担当した。保育園では昨年から 4 施設で、病院では県立病院 2 施設で行った。コロナ禍の継続により、病院実習、保育園実習とも一部が学内代替実習となり、実習目標の達成がぎりぎりな学生も少なからず生じ、追実習になった者が 8 人いた。総合実習では新たなクリニックを 1 施設開拓し 2 クリニック、2 病院で実習した。病院の一部が学内代替実習になったものの充実した実習ができた。

大学院では昨年度入学の院生が修士論文をまとめることを濱中教授、下野准教授で支援し、無事に完成することができた。今後もコロナ禍で様々に制限があるなかで、学部教育、大学院教育に尽力していきたい。

### 3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

下野准教授は科学研究費の助成を受け、「早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究（課題番号：21K17389）」（研究代表者）に取り組んでおり、文献検討の成果を日本小児看護学会第 32 回学術集会において示説発表した。令和 4 (2022) 年度は質問紙調査を実施し、その量的データの分析結果について、濱中教授、秋本助教、遠藤助手とともに 26th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2023 において示説発表した。さらに質的データの分析結果について、日本小児看護学会第 33 回学術集会において、濱中教授、遠藤助手とともに示説発表を予定している。

遠藤助手は大学院の修論「療養生活を継続している学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題」をまとめ、濱中教授、下野准教授とともに同じく第 33 回学術集会において口頭発表を予定している。

次年度以降も小児看護学領域として、研究活動を充実させて、社会に貢献していきたい。

## 令和 4 (2022) 年度 精神看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

岡田実 (教授)、長南幸恵 (准教授)、佐藤つかさ (助教)

### 2. 精神看護学領域における教育に関する内容と評価

今年度、精神看護学領域の講義は当初の予定通り、1年次からの新カリの開講を含めて終了した。領域別実習では総合実習が当初の予定通り実施できたが、専門領域別実習では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2週とも学内実習を余儀なくされたクール、実習クールの1週目あるいは2週目が学内実習を余儀なくされる実習が、昨年度よりも増えた。さらに、実習生が濃厚接触者に該当したことに伴い、追実習を余儀なくされた実習生が4人にのぼった。このグループの実習も病院側の事情により、追実習受け入れ困難な事態となった。

学内実習に振替となった学生には学修上の不利益とならないように、事例を提供し、その事例に沿った看護計画のプレゼンテーション及び質疑応答によって、看護計画策定の根拠を深める演習を行った。新型コロナ感染拡大に伴う領域別実習の制限が、学生の不利益にならないように、各種の工夫を試みることができたと考えている。

また、毎年、看護計画策定用紙の書式を学生の自然な認知過程に沿ったものになるよう修正を加えてきたが、新年度を見越して書式の抜本的な改訂を行い、一覧性に優れた書式(ひと目で看護問題の抽出とその根拠を呈示できるような書式)に改めて、学生の認知プロセスに沿ってスムーズな看護過程展開に寄与できるように書式改訂を行った。意図したとおり、書式は看護過程を展開する作業のしやすさという点で実習生から好評価が得られた。

### 3. 精神看護学領域における研究に関する内容と評価

精神看護学領域では、研究室構成員それぞれの専門性の確立を目指している。

現在、分野としては、令和3(2021)年度に『岩手沿岸部にある医療機関の看護部に対するICTによる地域貢献—継続した看護研究の支援プログラム提供の可能性について』を学内研究発表会において、ICTによるプログラムの実現可能性を実証したことを受け、令和4(2022)年度は前年度の看護研究支援のフォローアップ(専門誌への投稿原稿や発表スライドのチェックなど)に加え、S病院の看護師長6人による、令和4(2022)年度の実践目標に関するコンサルテーションを追加することを、当該病院看護部と打ち合わせた。

看護研究フォローアップは、3か月毎に1回、年間で4回程度開催するように予定された。学会誌への投稿や学会発表の時期を迎えている研究グループメンバーとZoomでミーティングを行い調整した。

看護師長6人に対するコンサルテーションでは、1か月毎に1回、年間で11回程度のコンサルテーションが予定された。コンサルテーションでは看護師長個々の実践課題を述べその進行度合いを報告しながら、問題や課題を参加者が一緒に検討する場とし、コンサルタントはプロセス・コンサルテーションにしたがって、コンサルティの意見交換を中心にディスカッションの方向付けやまとめの役割を果たすようにした。6人の看護師長の実

実践課題は以下の通りである。

- ①病棟看護の質評価から見える病棟の課題と取組み
- ②新たに迎えた新専門職と外来との連携調整
- ③看護師個々のキャリアアップを目指した効果的な目標管理
- ④病棟の看護力の維持向上に向けての取組み
- ⑤療養介助員と看護師のケアをめぐる協働関係の調整
- ⑥集積されたインシデントレポート分析結果の病院・病棟へのフィードバック

以上の課題を初回スライド2・3枚にその概要をまとめ、進行度合いに応じてスライド1枚程度でその後の進行度合いをプレゼンテーションする方法（15×3=45分間）を採った。さらに、以下の文献（3部、8章からなる）を指定して看護師長、副看護部長、コンサルタントの8人で読後感を出し合い、ディスカッションする課題（毎回1章ずつ15分間）も付け加えた。

**【指定文献】**

エイミー・C・エドモンドソン著，野津智子訳（2021）

『恐れのない組織—「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす』

英治出版株式会社（¥2,420）

- ・看護研究フォローアップおよび師長コンサルテーション：16回 令和5（2023）年2月まで）
- 〔※コロナ禍という困難な病棟運営を強いられながらも、急遽休会せざるを得なかったミーティングが12月に1回あっただけで、他の日程は予定通り開催。〕
- ・K病院看護部との調整2回：12/14（17：00～）、2/7（17：00～）
- ・指定文献の進行度合い：全285頁中187頁（第6章）まで読了
- ・また、令和4（2022）年度は公開講座の当番領域でもあり、『ICTを利用した臨床現場と大学の新たな連携—Zoomでどんなことがどこまでできるか』と題して令和4（2022）年10月29日（土、13：00～）開催した。学外からの参加者が4人と少なかったが、コロナ以前から始めた実験的な試みの全体を紹介し、コストパフォーマンスの高い成人教育の方法を提示できたと考えている。今後は、開催1回の公開講座方式ではなく、連続6回程程度のプログラムを就業中の専門職成人に提供するリカレント教育カリキュラムづくりを展望している。
- ・上記の公開講座を担当したことがきっかけで、新年度より新たに県内K病院看護部の看護研究支援に繋がった。

## 令和4(2022)年度 公衆衛生看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

鈴木るり子(教授)、石田知世(助手)、磯島実奈(助手)

### 2. 公衆衛生看護学領域における教育に関する内容と評価

公衆衛生看護学領域が主担当となる科目として、3年次前期の科目に「ヘルスプロモーション論」、後期に「地域看護学概論」「地域看護援助論」(鈴木)を開講した。4年次には通年で4人の「卒業研究計画書」を完成させた。

講義担当者が1人であり、令和4(2022)年度から大学院の講義を行うことから前年度の「災害援助論」「災害看護論」「保健福祉行政論」は非常勤講師による講義とし、「保健福祉連携論」は学内の教員に変更した。助手が2人になったことから、講義のグループワークの進行や演習の指導等円滑に行うことが出来た。

令和4(2022)年度の保健師課程の学生数は10人である。本年度は、保健師課程の実習内容の充実を図るために、「公衆衛生看護学実習」に新たに「個人・家族・集団・組織の支援実習(乳児の継続家庭訪問実習)」と「公衆衛生看護管理論実習」を追加導入した。その為、4年次前期の開講科目の「公衆衛生看護技術論」は、4月からの開講では、家庭訪問技術の習得が困難であり、科目展開の順序性にも問題が生じることから、3月に9コマの前倒し講義を開講した。その成果は学生の実技試験結果や授業評価に反映されていた。

「公衆衛生看護管理論実習」は、本学の地元である中川町町内会の住民の方々を対象に、地域アセスメントから健康課題の抽出、改善のための活動計画をPDCA cycleを基に展開した。参加した住民の方々は、大学の施設内での健康チェックや学生の積極的な実習態度に好意的で、経年的に実習を引き受けていただけになった。実習内容が新聞に報道されたこともあり、学生の実習を楽しみにしている様子が見えた。

「公衆衛生看護学実習」「総合実習」における内容と評価については、「公衆衛生看護学実習」は市町村実習地5か所で実習ができたが、保健所実習は4か所中、時間短縮1か所、資料実習1か所あった。市町村・保健所実習どちらもCOVID-19関連の事業対応により実習内容がそれらに偏る状況であったが、中でも健康教育、家庭訪問、健康相談、地区組織活動、地域アセスメントシステム形成、健康危機管理についての学びを深めることが出来た。学生の満足度が4点中3.89点と高かった。また、「総合実習」は、4人が健康課題解決の政策提言を行うことを実習項目とし、積極的に取組、指導者から高い評価を得た。学生評価は概ね4点であり、満足度は高かった。

その他に、公衆衛生看護学領域で担当している「地域看護学実習」は4年前期に全学生を対象に実施した。地域事例のアセスメントの過程を通して、健康課題の抽出を捉え、看護職が地域アセスメントを実施する必要性について学びを深めた。学生の評価は、平均4点中3.89点であった。

### 3. 公衆衛生看護学領域における研究に関する内容と評価

公衆衛生看護学領域では、それぞれの研究テーマで取り組んできた。鈴木の研究は東日本大震災被災者の支援を目的にした大規模コホート研究：the RIAS Studyに分担研

究者として従事してきた 10 年間のデータを基に投稿した論文が日本公衆衛生雑誌に原著論文として掲載された。現在もデータ分析中であり、今後も投稿論文作成予定である。

また、令和 4（2022）年度からは基盤研究（C）（分担）課題番号：18K10108 研究課題人：被災回復期における虚弱の増悪・緩衝要因の解明と、地域特性に応じた虚弱予防の実践に取り組んでいる。

石田助手は、令和 5（2023）年 3 月に修士（学術、放送大学大学院）を取得した。修論テーマは「行政保健師による家族関係調整の実態－困難事例の調整過程から－」今後、論文投稿や学会発表をする予定。磯島助手は、修士論文に取り組み学内研究費の申請準備中である。



## 令和4(2022)年度 在宅看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

大沼由香（教授）、加藤美幸（助教）、太田ゆきの（助教）

### 2. 在宅看護学領域における教育に関する内容と評価

令和4(2022)年度は、1年次科目の「基礎ゼミナール」(大沼)、在宅看護学領域に関する科目としては、3年次科目の「在宅看護学概論」(大沼)、「在宅看護援助論」(大沼・加藤・太田)、保健医療福祉連携論(大沼)を担当した。4年次学生対象としては「在宅看護技術論」・「在宅看護学実習」(大沼・加藤・太田)を担当した。さらに、「総合実習(在宅看護学領域)(学生6人)」(大沼・加藤・太田)、「卒業研究ゼミナール(学生5人)」(大沼・加藤)を開講した。

教育に関する学生からの授業評価は高評価で、教員の熱意を感じていた。自由記載では、実習につながる授業展開がわかりやすい、訪問マナーも学べたのがよい、在宅看護過程の展開方法がわかりやすい等々好意的、肯定的であった。在宅看護学実習の授業評価は全体として高評価で、事前に目標を明確にして実習に臨むことができた、多様な事例の訪問ができた、学内実習が充実していた等の自由記載が多かった。

### 3. 在宅看護学領域における研究に関する内容と評価

大沼は研究代表者として平成31(2019)年度科研費助成事業に採択された「地域包括支援センターが行う住民主体の介護予防活動の創出支援システムの開発」研究の最終年度であった。これまで収集したデータを大沼・太田が分析し、日本老年社会科学学会、日本伝統医療看護連携学会、日本健康支援学会で4本の学会発表を行った。また、本研究に参加した盛岡市内の地域包括支援センターと社会福祉協議会を対象として研究結果報告会を12月にアイーナにて開催し、領域全員で対応した。本研究に関する次年度の学会発表予定として、現在2本が採択されており発表準備中である。また研究結果を用いて12月に公開講座を大沼・加藤・太田で実施した。現在は、論文投稿と研究報告書の作成中である。

大沼は、分担研究者として平成31(2019)年度科学研究費(研究代表者 横手裕)の「アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想史的研究」に参加し、学会発表2本、シンポジウムでの講演1回を行い、研究成果報告書を作成した。

大沼は、分担研究者として平成31(2019)年度科学研究費(研究代表者 赤間由美)の「生活保護現業員と保健師の協働による自己効力感向上を目指したケース会議の検証」に参加し、大沼が開発した「わかる事例検討会」の運営方法を用いて検証に協力している。大沼が開発した事例検討研修会に加藤・太田も参加し、在宅看護学実習の学生カンファレンスに活かす手法を開発中である。

太田は、外来看護における疼痛ケアに関して継続研究しており、質的分析結果を日本伝統医療看護連携学会で発表し、これを元に論文投稿中である。加藤は、学内の共同研究(研究代表者 斎藤史枝)に参加し、データ収集を担当した。

また、大沼は在宅看護に関する研究結果を用いて、日本専門看護師協議会の研修講師、

介護支援専門員等の専門職対象出前講座 1 回を行った。その他、介護予防の出前講座として、大沼 1 回、大沼・太田で 1 回実施し、加藤は在宅における排泄ケアの出前講座 1 回を担当し、領域としては、計 4 回の出前講座を担当した。さらに、学内で令和 3 (2021) 年度に「在宅ケアチーム」(大沼・加藤・鈴木・石田・相澤) で実施した「新型コロナウイルス感染予防と地域での暮らしを守る研修会事業」の実施内容と成果をまとめ、日本地域看護学会で報告した。

在宅看護学領域全体で研究への積極的な取り組みを行っており、次年度も引き続き、在宅ケア力の向上・啓発に貢献していきたい。

令和4（2022）年度 大学院科目一覧

【共通科目】

	科目名称	開講時期	単位数	担当教員	開講
必修	看護研究方法特論	1前	2	勝野とわ子	○
	臨床倫理特論	1後	2	清水哲郎・濱中喜代・石井真紀子	○
	多職種連携特論	1後	2	鈴木るり子・相澤出	○
	看護学教育特論	1後	2	江守陽子・濱中喜代・土田幸子・石井真紀子	○
選択	看護理論特論	1前	2	岡田実・濱中喜代・勝野とわ子	
	統計学特論	1前	2	大井慈郎	○
	質的研究方法論	1前	2	相澤出	○
	フィジカルアセスメント特論	1前	2	長谷川幹子・江守陽子	
	医療社会学特論	1後	2	相澤出	○
	コンサルテーション特論	1後	2	岡田実	○
	災害看護特論	1後	2	鈴木るり子	

【専門科目】

	科目名称	開講時期	単位数	担当教員	開講
基礎・地域連携看護学領域	基礎看護学特論Ⅰ	1前	2	長谷川幹子	○
	基礎看護学特論Ⅱ	1後	2	長谷川幹子	○
	基礎看護学演習Ⅰ	1前	2	長谷川幹子・石井真紀子	○
	基礎看護学演習Ⅱ	1後	2	長谷川幹子	○
	地域看護学特論Ⅰ	1前	2	鈴木るり子	○
	地域看護学特論Ⅱ	1後	2	鈴木るり子	○
	地域看護学演習Ⅰ	1前	2	鈴木るり子	○
	地域看護学演習Ⅱ	1後	2	鈴木るり子	○
臨床・応用看護学領域	老年看護学特論Ⅰ	1前	2	勝野とわ子	
	老年看護学特論Ⅱ	1後	2	勝野とわ子	
	老年看護学演習Ⅰ	1前	2	勝野とわ子	
	老年看護学演習Ⅱ	1後	2	勝野とわ子	
	母性看護学特論Ⅰ	1前	2	江守陽子	
	母性看護学特論Ⅱ	1後	2	江守陽子	
	母性看護学演習Ⅰ	1前	2	江守陽子・大谷良子・佐藤恵	
	母性看護学演習Ⅱ	1後	2	江守陽子・大谷良子・佐藤恵	
	小児看護学特論Ⅰ	1前	2	濱中喜代	
	小児看護学特論Ⅱ	1後	2	濱中喜代	
	小児看護学演習Ⅰ	1前	2	濱中喜代・下野純平	
	小児看護学演習Ⅱ	1後	2	濱中喜代・下野純平	
	精神看護学特論Ⅰ	1前	2	岡田実	
	精神看護学特論Ⅱ	1後	2	岡田実	
精神看護学演習Ⅰ	1前	2	岡田実・長南幸恵		
精神看護学演習Ⅱ	1後	2	岡田実・川添郁夫（非常勤）		
看護管理学領域	看護管理学特論Ⅰ	1前	2	伊藤收	○
	看護管理学特論Ⅱ	1前	2	伊藤收	○
	看護管理学特論Ⅲ	1前	2	伊藤收	○
	看護管理学演習	1後	2	伊藤收・土田幸子	○
研究科目	看護学特別研究	2通	8	濱中喜代・勝野とわ子・江守陽子・長谷川幹子・岡田実・伊藤收・鈴木るり子・土田幸子・石井真紀子・長南幸恵・相澤出・下野純平・大谷良子・佐藤恵	○

## 令和4(2022)年度 大学院 共通科目活動報告

### 1. 教員構成

清水哲郎(教授)、濱中喜代(教授)、勝野とわ子(教授)、江守陽子(教授)、岡田実(教授)、鈴木るり子(教授)、長谷川幹子(准教授)、土田幸子(准教授)、石井真紀子(講師)、相澤出(講師)、大井慈郎(講師)

### 2. 大学院共通科目における教育に関する内容と評価

#### 【看護研究方法特論】勝野とわ子

本科目の到達目標は、1. 看護学における科学的な研究のプロセスを理解し説明できる、2. 量的および質的研究デザインの理解を深め説明できる、3. 量的研究と質的研究のクリテイク基準を理解し実践できる、4. 質的研究のデータ収集方法と分析方法についてフィールドワークを実施し理解を深めることであった。履修学生は、授業への取り組みの姿勢もよく、1~4について高いレベルで達成したと評価する。

#### 【臨床倫理特論】清水哲郎、濱中喜代、石井真紀子

履修者は4人であった。授業においては、臨床倫理の理論、看護における倫理的な概念、臨床倫理検討シート等についての講義、履修者による臨床で遭遇した事例の報告とそれに関する話し合い、さらに検討シートによる共同検討を行った。なお、授業の一部は臨床倫理研究センター懇話会出席とレポート提出をもって代えた。事例の共同検討は、臨床の振り返りとして有意義であった。上記センターとの連携は今後も本科目の内容のさらなる充実のために検討を進めたい。

#### 【多職種連携特論】鈴木るり子、相澤出

「多職種連携特論」は、後期に開講し、鈴木と相澤が担当した。本講義では、多職種連携を理論的に考察する視点として、多職種連携に関する我が国の現状と課題について分析し、社会的な視点を取り入れ教授した。また、事例として「日本海溝・千島海溝による巨大地震津波による大規模災害地北海道えりも町」を設定し、他(多)職種連携による防災対策-初期体制-についてグループワークを行い理論的に考察した。受講生4人は単位を取得している。

#### 【看護学教育特論】江守陽子、濱中喜代、土田幸子、石井真紀子

看護基礎教育と継続教育の現状と課題、看護職への教育のあり方について教授した。具体的には、看護教育制度、看護教育カリキュラムの変遷と課題、成人学習に関する教育方法論、看護基礎教育および看護継続教育における教育プログラムの作成・教育内容・教材開発・教育評価の方法や留意点を教授した。

以上を基に、これからの臨床実習教育のあり方や看護の機能について相互にディスカッションし、教育者としての自覚を養成した。

**【看護理論特論】岡田実、濱中喜代**

開講なし。

**【統計学特論】大井慈郎**

本授業は、統計学の研究手法について、データの収集方法から多変量解析の基礎までを幅広く扱った。全15回中、5回目以降は、実際に統計ソフトを用い、1人1人がデータセットを操作しながら、分析の意味や結果の読み方、論文執筆の際の表記方法を学修した。受講生はそれまでの経歴から数学や統計に関する知識に差があったが、少人数教育である強みを活かし、理解度を確認しつつ授業を進行することができた。

**【質的研究方法特論】相澤出**

本科目では1) 質的研究の特徴について方法論的な解説を行いつつ、2) 看護学では用いられることが少ない方法（フィールドワーク、参与観察法、エスノグラフィー、ライフヒストリー、ライフストーリー等）を取り上げ、それぞれの方法の特徴について解説を行った。授業は具体的に岸・石岡・丸山著、2016、『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣、波平恵美子・小田博志著、2010、『質的研究の方法——いのちの〈現場〉を読みとく』春秋社の二冊を、受講者が担当部分を決めて報告し、質疑応答し、適宜解説を講義担当者が加えるというゼミナール形式をとった。この形式をとることで、受講者がテキストを読み解き、まとめるといった学問的に基礎的な力を養成することも狙った。受講者は毎回、テキストの内容について報告を行い、疑問やコメントを積極的に出しており、その取り組みは評価できるものであった。受講者は4人であった。

**【フィジカルアセスメント特論】長谷川幹子、江守陽子**

開講なし。

**【医療社会学特論】相澤出**

本科目では、受講者の問題関心等を講義前に聞き取り、それらをふまえてシラバスの内容から変更を加えつつ、ゼミナール形式で授業を行った。テキストとして猪飼周平、2010、『病院の世紀の理論』有斐閣を用い、近代以降の病院、医療システムの構造と変化、日本における病院を中心とした医療システムの意義と問題点、地域包括ケアの課題について学習を進めた。受講者は毎回、テキストの担当部分の報告を行い、そこで出た感想等について受講者同士の議論を促し、疑問やその箇所的重要論点について講義担当者が解説を行った。医療社会学、医療政策、近・現代史に関する難解な専門書がテキストではあったが、受講者は意欲的に取り組んでいたと評価できる。受講者は4人であった。

**【コンサルテーション特論】岡田実**

選択科目：履修生1人。受講者自身が臨床現場において経験しているコンサルテーションを想起してもらいながら、コンサルタント、コンサルティーいずれの立場に置かれても、基本は望ましい協力関係という相互作用の確立であることを確認する授業となっ

た。Edgar H. Schein による『人を助けるとはどういうことか』（英治出版）を指定文献にディスカッションを行ったが、常に受講者の修論のテーマに引き寄せながら、看護管理者としての成長とコンサルタントとしての役割を確認しながら意見交換することを心がけた。

【災害看護特論】鈴木るり子  
開講なし。

以上

## 令和4(2022)年度 大学院 基礎・地域連携看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

鈴木るり子（教授）、長谷川幹子（准教授）、石井真紀子（講師）

### 2. 大学院基礎・地域連携看護学領域における教育に関する内容と評価

#### 【基礎看護学特論Ⅰ】長谷川幹子

本科目は、看護活動の場で実践されている看護援助の理論的背景について説明できること、及び、自己の看護実践を理論と統合し、考察できることを目標とした。看護活動の場で実践されている看護援助の理論として、ペプロウ看護論、トラベルビー看護論、ストレス・コーピング理論などの中範囲論の背景及び実践への活用についての学修や意見交換を通して、おおむね目標を達成することができた。

#### 【基礎看護学特論Ⅱ】長谷川幹子

本科目は、看護活動の場で実践されている看護援助技術や受講生が関心を持つ看護援助技術について、文献検討及び根拠となる理論からの分析・考察、また、根拠に基づく看護援助技術を提供するための方法を探究することを目的とした。受講生自身の看護実践や看護教育の場における体験のプレゼンテーションとディスカッションを通して、看護援助技術とその根拠となる理論についての学びを深めることができた。目標はおおむね達成できた。

#### 【基礎看護学演習Ⅰ】長谷川幹子、石井真紀子

本科目は、文献検索に必要な知識と技術を修得すること、及び、文献のクリティークを行うことを目標とした。看護の対象者へ提供されている看護援助に関連した文献及び受講生が興味のある看護現象に関する文献を収集、講読した。また、文献のクリティークを通して研究の実際を学び、自らの研究計画と研究論文を作成する際の基盤となることの理解を促がした。目標はおおむね達成したと評価する。

#### 【基礎看護学演習Ⅱ】長谷川幹子

本科目は、文献のクリティークを行い研究成果や課題を考察すること、及び、研究計画書を作成することを目標とした。受講生の興味・関心のある研究テーマに関する国内外の文献レビューを行ったが、受講生が取り組もうとしている研究テーマは前例がなく、先行研究が少ないこと、また、受講生が長期履修学生であることを踏まえ、時間をかけて丁寧に取り組んだ。受講生の進捗状況に応じて柔軟に目標設定そのものを見直しながら、研究計画の試案を作成した。

#### 【地域看護学特論Ⅰ】鈴木るり子

本科目では、地域看護学に関連のある看護課題の中で、特に地域社会で療養生活を営んでいる様々な対象者が、看護実践を受けるときの諸制度の違いがどのような影響を与えているのか、国内外の制度や看護職の養成制度について講義した。特にドイツの新法

「看護介護職改革法」を題材に日本の今後の少子高齢化の中で、重要視されている看護職の養成制度について討議した。到達目標についてはほぼ達成したと評価する。

**【地域看護学特論Ⅱ】鈴木るり子**

地域ケアシステム構築に関する概念や理論について整理し、理解を深めた。さらに、健康格差の文献を中心に国内外の健康格差について批判的に捉え、今後の我が国の高齢化、人口減少の推移を分析しながら必要とされる、新たな諸制度について学修した。到達目標についてはほぼ達成したと評価する。

**【地域看護学演習Ⅰ】鈴木るり子**

院生の興味ある地域看護学に関連のある看護課題および健康課題について、国内外の文献を収集し、批判的な分析を加え地域看護学領域研究の基礎能力が養われることを目指した。本科目では、文献クリティークの方法を修得し、適切な文献検討をする能力が得られたと評価する。

**【地域看護学演習Ⅱ】鈴木るり子**

本科目では、研究テーマの確定、研究の意義、研究対象、研究デザイン、研究計画の手順を検討し、研究計画書の作成に着手した。さらに、研究計画書を研究倫理審査会へ提出するために研究倫理審査申請書を作成し、提出を目指した。

以上



## 令和4(2022)年度 大学院 臨床・応用看護学領域活動報告

### 1. 領域構成

勝野とわ子（教授）、江守陽子（教授）、濱中喜代（教授）、岡田実（教授）、下野純平（講師）、長南幸恵（講師）、大谷良子（助教）、佐藤恵（助教）、川添郁夫（非常勤）

### 2. 大学院臨床・応用看護学領域における教育に関する内容と評価

【老年看護学特論Ⅰ】勝野とわ子  
開講なし。

【老年看護学特論Ⅱ】勝野とわ子  
開講なし。

【老年看護学演習Ⅰ】勝野とわ子  
開講なし。

【老年看護学演習Ⅱ】勝野とわ子  
開講なし。

【母性看護学特論Ⅰ】江守陽子  
開講なし。

【母性看護学特論Ⅱ】江守陽子  
開講なし。

【母性看護学演習Ⅰ】江守陽子、大谷良子、佐藤恵  
開講なし。

【母性看護学演習Ⅱ】江守陽子、大谷良子、佐藤恵  
開講なし。

【小児看護学特論Ⅰ】濱中喜代  
開講なし。

【小児看護学特論Ⅱ】濱中喜代  
開講なし。

【小児看護学演習Ⅰ】濱中喜代、下野純平  
開講なし。

【小児看護学演習Ⅱ】濱中喜代、下野純平  
開講なし。

【精神看護学特論Ⅰ】岡田実  
開講なし。

【精神看護学特論Ⅱ】岡田実  
開講なし。

【精神看護学演習Ⅰ】岡田実、長南幸恵  
開講なし。

【精神看護学演習Ⅱ】岡田実、川添郁夫  
開講なし。

以上

## 1. 領域構成

伊藤 収 (教授)、土田 幸子 (准教授)

## 2. 大学院看護管理学領域における教育に関する内容と評価

### 【看護管理学特論Ⅰ】伊藤 収

履修生：1人

本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：ファーストレベル」に相当する科目である。

昨年度とは異なり、履修生が現職の看護師長1人であったため、計画通りに学修を進めることができた。

### 【看護管理学特論Ⅱ】伊藤 収

履修生：1人

本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：セカンドレベル」に相当する科目である。

上記の「特論Ⅰ」の学修をふまえて、看護部長職を支える次長職(副部長)等が担う「人事管理・業務管理」と実習調整、院内教育等が主な学修内容である。

なお、履修生は院内教育、特に教育師長職業務に関心が高かったため、担当教員の経験も踏まえ、想定していた内容より詳しく教授することとなった。

### 【看護管理学特論Ⅲ】伊藤 収

履修生：1人

本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：サードレベル」に相当する科目である。

上記の「特論Ⅰ・Ⅱ」の学修をふまえて、看護部長職に必要とされる「目標管理・人事考課・経営参画」などを教授した。

なお、履修生が看護学部を有する大学の附属病院勤務であることを受け、附属病院と同法人内の看護学部とのユニフィケーションについて、担当教員の2つの大学での経験をふまえ詳しく教授した。

### 【看護管理学演習】伊藤 収、土田 幸子

履修生：1人

本科目は「認定看護管理者」の資格取得に向け、必要となる各種の「レポート類」作成を中心に演習を行った。

また、今年度はレポート作成が学位論文作成にも資するような内容とする工夫を行った。併せて、認定看護管理者資格を取得するための自施設の「組織分析」と、それを基にした「組織改善計画」の策定等に重点を置き、2人の教員からプレゼンテーションについても詳しく教授した。

### 3. 大学院看護管理学領域における研究に関する内容と評価

領域を構成する2人の教員に、これまで共同研究等の取り組みはない。今般、その2教員が、履修生の主指導教員、副指導教員となったことで、領域研究・共同研究に向けての素地ができたと考えている。

以上

## 令和4(2022)年度 大学院 研究科目活動報告

### 1. 教員構成

濱中喜代(教授)、勝野とわ子(教授)、江守陽子(教授)、岡田実(教授)、伊藤收(教授)、鈴木るり子(教授)、長谷川幹子(准教授)、土田幸子(准教授)、石井真紀子(講師)、長南幸恵(講師)、相澤出(講師)、下野純平(講師)、大谷良子(助教)、佐藤恵(助教)

### 2. 大学院研究科目における教育に関する内容と評価

【看護学特別研究・老年看護学分野】勝野とわ子、清水哲郎

老年看護学特論Ⅰ・Ⅱ、老年看護学演習Ⅰ・Ⅱおよび看護研究方法特論を通し明確化したリサーチクエスチョンから研究計画書の作成を指導した。さらに、看護学特別研究では、パイロットスタディ、研究計画書の修正、データ収集、分析、結果、考察の各ステップを分かりやすく指導した。学位論文作成の最終段階では、論文の精度を上げるための文章力アップなども指導し新規性のある論文を完成させることができた。学位論文作成についての学生の満足度も非常に高かった。

【看護学特別研究・母性看護学分野】江守陽子、大谷良子

母性看護学特論Ⅰ・Ⅱ、母性看護学演習Ⅰ・Ⅱを通し培った課題およびリサーチクエスチョンに対する研究目的、研究方法を明確にし、研究計画立案を指導した。さらに、看護学特別研究では、調査の実施、分析、結果、考察について論文作成過程を指導した。最終的に修士論文を完成させることができた。

【看護学特別研究・小児看護学分野】濱中喜代、下野純平

昨年の小児看護学演習Ⅱで作成した研究計画に沿って、看護学特別研究の指導について主指導を濱中教授が、副指導を下野講師が担当し指導を行った。具体的には、調査はほぼ予定の期間に9人の訪問看護師に面接を実施し、その後分析を進め、結果、考察について内容を吟味していくという方法で進めた。意味内容が通じるように文章の完成度を高めることや文献検討・考察の仕方等において指導を要した。1つ1つの文章についての詳細な指導により、最終的には完成度の高い論文が仕上がった。

【看護学特別研究・看護管理学分野】伊藤收、岡田実

1年前期の看護管理学特論の講義の中で、履修生2人の個々の研究関心を深め、後期の看護管理学演習と並行して研究倫理審査申請に向けての指導を行った。また、研究計画確定の段階で、副指導の岡田教授から指導を受けて研究倫理審査に臨んだ。

データ収集に際しては、コロナ禍の影響を受け、インタビュー調査の一部を対面からリモートに変更するなどの対応を行い、データ分析の最終段階で岡田教授からの指導を受けた。なお、データ分析から論文作成の間は履修生2人の合同指導の形をとり、それが相互に学びを深めることにつながり、修士学位論文の完成の一助になったと考えている。

以上

## 個人ごと業績

## 【学部】

### ■ 清水 哲郎（一般教養：教授）

## 【著書】

- 1) 仙台白百合女子大学カトリック研究所編：『いのちと霊性：キリスト教講演集』，共著，教友社，2023.2 全 473 頁．清水哲郎 担当執筆部分（単著）：最期まで自分らしく生きるために：臨床死生学の核心（76-111）．

## 【論文】

- 1) 清水哲郎：認知症の方の最善を考えることと意思決定支援，看護技術 68-6:4-14, 2022.5
- 2) 清水哲郎：「臨床倫理検討シート」を活用した認知症者・家族への意思決定支援，看護技術 68-6:23-35, 2022.5

## 【学会発表】

- 1) 清水哲郎：シンポジスト講演（招待）「倫理的姿勢と具体的行動との間で」，第70回日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会 シンポジウム4「医療ソーシャルワーカーの新行動基準が目指すもの」2022.6.25（和歌山，オンライン参加）
- 2) 清水哲郎：学術教育講演3（招待）「認知症高齢者と家族の意思決定支援—臨床倫理の視点から—」，第41回日本認知症学会学術集会・第37回日本老年精神医学会 [合同開催]，2022.11.25（東京国際フォーラム）

## 【その他】

- 1) 清水哲郎：《人それぞれ》と《皆一緒》—「個別最適な学び」と「協働的な学び」に向けて—，教育研究岩手（岩手県立総合教育センター）110:1（教育随想）2022.12 [http://www1.iwate-ed.jp/02sougou/r04\\_kyouikukenkkyu\\_iwate.pdf](http://www1.iwate-ed.jp/02sougou/r04_kyouikukenkkyu_iwate.pdf)

### ■ 相澤 出（一般教養：准教授）

## 【著書】

- 1) 相澤出：2022、「第8章 介護と看取りをめぐる集合的記憶と開かれた記録——二ツ井ふくし会の「ホームカミング」と『あんしんノート』を事例として」浮ヶ谷幸代・田代志門・山田慎也編『現代日本の「看取り文化」を構想する』東京大学出版会：191-211.

## 【論文】

- 1) 相澤出：2022、「過疎地域における訪問看護ステーションの機能と意義——宮城県

登米市の地域連携の事例から」『社会学研究』(107)：125-147.

### 【学会発表】

- 1) 佐々木直英, 遠藤光春, 石川学, 小城下留美子, 相澤出：2022年6月、「特別養護老人ホームの配置医はプライマリケア医の出番です！その2：ポリファーマシー対策の実践から」第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会

### 【その他】

- 1) 遠藤和子・幸史子・相澤出・山田カオル：2022、「看護小規模多機能型居宅介護で高齢腹膜透析者を受け入れるための教育プログラム開発」『地域ケアリング』25(1)：60-63.

## ■ 大井 慈郎（一般教養：講師）

### 【著書】

- 1) 大井慈郎（2022）. 非正規雇用労働者への視点－旧集落部アパート群調査より，内藤耕（編）：工業団地がやってきた－西ジャワの都市化と地域社会．165-185，風響社，東京．
- 2) 大井慈郎（2022）. 工場への就職から大学卒への夢，内藤耕（編）：工業団地がやってきた－西ジャワの都市化と地域社会．187-190，風響社，東京．

### 【論文】

- 1) 大井慈郎（2022）. 地域福祉の舞台としての町内会館・自治会館とその曖昧さの検討：宮城県X市におけるコロナ禍の閉鎖対応分析より．社会学年報，51，57-67.
- 2) 大井慈郎（2022）. 介護予防事業と地域資源：宮城県X市における高齢者サロンの設置過程分析より．日本都市社会学年報，40，190-205.

### 【学会発表】

- 1) 大井慈郎：介護予防事業における「地域づくり」と「閉じこもり防止」の隙間の検討，第68回東北社会学会大会，2022.7.17. オンライン

## ■ 長谷川 幹子（基礎看護学領域：教授）

### 【論文】

- 1) 長谷川幹子，小林道太郎（2022）. ナースコールが頻回なALS患者に関わる看護師の経験：解釈学的現象学的記述．日本看護科学会誌，42，614-622.



### 【学会発表】

- 1) 作間弘美, 成田真理子, 長谷川幹子, 武田恵梨子, 千田真太郎, 野中みつ子: 看護技術習得のための自己調整学習方略の検討ー生活援助技術演習振り返り用紙の結果期待と目標意図・実行意図の項目別変化よりー. 日本看護研究学会第48回学術集会, 松山市, 2022.
- 2) 作間弘美, 長谷川幹子, 野中みつ子, 武田恵梨子, 千田真太郎: COVID-19の影響から臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感の実態調査, 第42回日本看護科学学会学術集会, 広島市, 2022.

### ■ 作間 弘美 (基礎看護学領域: 講師)

### 【学会発表】

- 1) 作間弘美, 成田真理子, 長谷川幹子, 武田恵梨子, 野中みつ子, 千田真太郎: 看護技術習得のための自己調整学習方略の検討ー生活援助技術演習振り返り用紙の結果期待と目標意図・実行意図の項目別変化よりー, 日本看護研究学会第48回学術集会, 松山市, 2022.
- 2) 作間弘美, 長谷川幹子, 野中みつ子, 武田恵梨子, 千田真太郎: COVID-19の影響から臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感の実態調査, 第42回日本看護科学学会学術集会, 広島市, 2022.

### ■ 野中 みつ子 (基礎看護学領域: 助教)

### 【学会発表】

- 1) 作間弘美, 成田真理子, 長谷川幹子, 武田恵梨子, 千田真太郎, 野中みつ子: 看護技術習得のための自己調整学習方略の検討ー生活援助技術演習振り返り用紙の結果期待と目標意図・実行意図の項目別変化よりー 第48回日本看護研究学会学術集会, 松山市, 2022
- 2) 作間弘美, 長谷川幹子, 野中みつ子, 武田恵梨子, 千田真太郎: COVID-19の影響から臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感の実態調査, 第42回日本看護科学学会学術集会, 広島市, 2022

### ■ 武田 恵梨子 (基礎看護学領域: 助手)

### 【学会発表】

- 1) 作間弘美, 成田真理子, 長谷川幹子, 武田恵梨子, 千田真太郎, 野中みつ子: 看護技術習得のための自己調整学習方略の検討ー生活援助技術演習振り返り用紙の結果期待と目標意図・実行意図の項目別変化よりー 第48回日本看護研究学会学術集会,

松山市、2022

- 2) 作間弘美、長谷川幹子、野中みつ子、武田恵梨子、千田真太郎. COVID-19 の影響から臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感の実態調査、第 42 回日本看護科学学会学術集会、広島市、2022

#### ■ 千田 真太郎（基礎看護学領域：助手）

##### 【学会発表】

- 1) 作間弘美、成田真理子、長谷川幹子、武田恵梨子、千田真太郎、野中みつ子. 看護技術習得のための自己調整学習方略の検討-生活援助技術演習振り返り用紙の結果期待と目標意図・実行意図の項目別変化より-, 日本看護研究学会第 48 回学術集会, 松山市, 2022.
- 2) 作間弘美、長谷川幹子、野中みつ子、武田恵梨子、千田真太郎. COVID-19 の影響から臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感の実態調査, 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島市, 2022.

#### ■ 土田 幸子（成人看護学領域：教授）

##### 【学会発表】

- 1) 土田幸子, 井上智友記, 五十嵐岳, 信岡祐彦: 深部静脈血栓症予防のための下肢圧迫法の効果-超音波 Doppler 法を用いた血流速度変化による検討-, 第 69 回日本臨床検査医学会学術集会, 令和 4 年 11 月 (宇都宮)

#### ■ 佐藤 大介（成人看護学領域：助手）

##### 【論文】

- 1) 佐藤 大介, 松田 浩一, 手術室器械出し看護師の良い渡し方を形成する要因に関する一考察, 人工知能学会, 身体知研究会第 3 回研究会論文集, No. 1, <http://www.sigskl.org/activity/papers/sig-skl-20230228-1.pdf>, 2023.

##### 【学会発表】

- 1) 佐藤 大介, 松田 浩一, 手術室器械出し看護師の良い渡し方を形成する要因に関する一考察, 第 39 回身体知研究会 (web 開催), 2023

■ 勝野 とわ子（老年看護学：教授）

【著書】

- 1) 勝野とわ子：睡眠．真田弘美、正木治恵編，老年看護学技術（改訂第4版）（p97-107），2023.
- 2) 勝野とわ子：不眠．真田弘美、正木治恵編，老年看護学技術（改訂第4版）（p271-282），2023.

【学会発表】

- 1) 青山美紀子，勝野とわ子，出貝裕子，森田牧子，前田優貴乃：若年認知症家族介護者の介護生活で経験する健康問題と対処．日本看護科学学会学術集会，広島市，2022.
- 2) 出貝裕子，青山美紀子，森田牧子，勝野とわ子：若年認知症家族介護者が抱く秘匿感情の変化．日本看護科学学会学術集会，広島市，2022.
- 3) 岩瀬和恵，勝野とわ子：介護老人福祉施設に勤務する看護師が看取りに向けて行動する動機となった事象とその後の行動．日本看護科学学会学術集会，広島市，2022.

■ 吹田 夕起子（老人看護学領域：教授）

【学会発表】

- 1) 高田由美，吹田夕起子，柳修平：認知症高齢者の摂食困難に対する施設職員の認識と多職種連携との関連．第42回日本看護科学学会学術集会，2022年12月，広島（オンライン発表）.

■ 齋藤 史枝（老年看護学領域：助教）

【学会発表】

- 1) 齋藤史枝，木内千晶，赤石美幸：介護老人保健施設職員の急変時の感染対策を含めた対応の実態とシミュレーショントレーニングのニーズ，第24回北日本看護学会学術集会（Web開催），2022年9月.

■ 赤石 美幸（老年看護学領域：助手）

【学会発表】

- 1) 齋藤史枝，木内千晶，赤石美幸：介護老人保健施設職員の急変時の感染対策を含めた対応の実態とシミュレーショントレーニングのニーズ，第24回北日本看護学会学術集会（Web開催），2022.

## ■ 江守 陽子（母性看護学領域：教授）

### 【著書】

- 1) 川口孝康、江守陽子編集：看護学テキスト 統合と実践—看護倫理 改訂第2版  
Gakken, 2023

### 【論文】

- 1) 佐藤恵、大谷良子、江守陽子：不妊治療後出産した女性の出産体験，日本生殖看護学会誌 18 (1)：11-19, 2021

### 【学会発表】

- 1) 佐藤恵，大谷良子，江守陽子：  
卵子提供をうけ出産に至った女性の体験  
第36回日本助産学会学術集会(Web学会)，2022年3月，神戸市. 助産学会
- 2) Megumi Sato, Yoshiko Otani, and Yoko Emori.  
Experiences of women giving birth during the COVID-19 pandemic in Japan  
25TH EAFONS (2022) Virtual via Zoom Webinar  
台北、台湾国立陽明交通大学 (National Yang Ming Chiao Tung University)  
2022年4月21日(木)～22日(金)
- 3) Hiromi Tobe, Mari Ikeda, Takafumi Soejima, Sachiko Kita, Iori Sato, Mayumi Morisaki-Nakamura, Kiyoko Kamibeppu, Crang Hart and Yoko Emori.  
Japan Effectiveness of a Group-based Anger Management Program in Improving Anger Expression among Japanese Mothers.  
25TH EAFONS (2022) Virtual via Zoom Webinar  
台北、台湾国立陽明交通大学 (National Yang Ming Chiao Tung University)  
2022年4月21日(木)～22日(金)

## ■ 大谷 良子（母性看護学領域：准教授）

### 【著書】

- 1) 川口孝泰・江守陽子編集：Basic & Practice 看護学テキスト 統合と実践-看護倫理 改訂第2版，株式会社 Gakken, 2023. 大谷良子分担執筆：step3 臨地実習を通じたの学び，看護職から学ぶ-ロールモデルと反面教師

### 【論文】

- 1) 佐藤恵、大谷良子、江守陽子：新型コロナウイルス感染症パンデミック時の岩手県内産科医療施設における感染症対策および妊産婦ケアの実態，日本助産学会誌，36 巻 1号，2022.

### 【学会発表】

- 1) Megumi Sato, Yoshiko Otani, and Yoko Emori : Experiences of women giving birth during the COVID-19 pandemic in Japan, The 25<sup>th</sup> East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2022, TAIWAN (On-line).
- 2) Megumi Sato, Yoshiko Otani, and Yoko Emori : Experiences of women giving birth during coronavirus disease pandemic in Japan: an internet-based survey , The 26<sup>th</sup> East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS), 2023.

### ■ 佐藤 恵（母性看護学領域：助教）

#### 【論文】

- 1) 佐藤恵, 大谷良子, 江守陽子 (2022). 新型コロナウイルス感染症パンデミック時の岩手県内産婦人科医療施設における感染症対策および妊産婦ケアの実態, 日本助産学会誌, 36(1). 115-128.

### 【学会発表】

- 1) Experiences of women giving birth during coronavirus disease pandemic in Japan: an internet-based survey, Megumi Sato, Yoshiko Otani, and Yoko Emori, The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2023, TOKYO
- 2) Experiences of women giving birth during the COVID-19 pandemic in Japan, Megumi Sato, Yoshiko Otani, and Yoko Emori, The 25th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2022, TAIWAN (On-line)

### ■ 濱中 喜代（小児看護学領域：教授）

#### 【学会発表】

- 1) 下野純平, 秋本和宏, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2022). NICU 退院児フォローアップ外来における看護に関する国内文献検討, 日本小児看護学会第 32 回学術集会.
- 2) Junpei Shimono, Asako Endo, Kazuhiro Akimoto, Kiyo Hamanaka. (2023). Follow-up of neonatal intensive care unit discharged infants in outpatient departments to assess the actual conditions of nursing practice, 26th East Asian Forum of Nursing Scholars.

## ■ 下野 純平（小児看護学領域：准教授）

### 【学会発表】

- 1) 下野純平, 秋本和宏, 遠藤麻子, 濱中喜代: NICU 退院児フォローアップ外来における看護に関する国内文献検討. 日本小児看護学会第 32 回学術集会, 2022 年 7 月, 福岡.
- 2) Junpei Shimono, Asako Endo, Kazuhiro Akimoto, Kiyoko Hamanaka: Follow-up of neonatal intensive care unit discharged infants in outpatient departments to assess the actual conditions of nursing practice. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2023 年 3 月, Tokyo.

### 【その他】

- 1) 濱中喜代, 下野純平 (2022): 2023 年度版医学書院看護師国家試験問題集. 『系統看護学講座』編集室(編), 医学書院, 東京. 小児看護学一般問題・状況設定問題の解答・解説

## ■ 秋本 和宏（小児看護学領域：助教）

### 【学会発表】

- 1) 下野純平, 秋本和宏, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2022). NICU 退院児フォローアップ外来における看護に関する国内文献検討, 日本小児看護学会第 32 回学術集会.
- 2) Junpei Shimono, Asako Endo, Kazuhiro Akimoto, Kiyoko Hamanaka. (2023). Follow-up of neonatal intensive care unit discharged infants in outpatient departments to assess the actual conditions of nursing practice, 26th East Asian Forum of Nursing Scholars.

## ■ 遠藤 麻子（小児看護学領域：助手）

### 【論文】

- 1) 療養生活を継続している学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状と課題. 遠藤麻子, 岩手保健医療大学大学院看護学研究科修士論文.

### 【学会発表】

- 1) 下野純平, 秋本和宏, 遠藤麻子, 濱中喜代: NICU 退院児フォローアップ外来における看護に関する国内文献検討. 日本小児看護学会第 32 回学術集会, 2022 年 7 月, 福岡.
- 2) Junpei Shimono, Asako Endo, Kazuhiro Akimoto, Kiyoko Hamanaka: Follow-up of

neonatal intensive care unit discharged infants in outpatient departments to assess the actual conditions of nursing practice. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2023年3月, Tokyo.

■ 岡田 実（精神看護学領域：教授）

【その他】

- 1) 岡田実, 長南幸恵, 佐藤つかさ: ICT を利用した臨床現場と大学の新たな連携—Zoom でどんなことがどこまでできるか, 2021 (令和 4) 年度岩手保健医療大学公開講座 (2022 年 10 月 29 日, 岩手保健医療大学より Zoom 配信)

■ 鈴木 るり子（公衆衛生看護学領域：教授）

【論文】

- 1) 鈴木るり子, 坪田 (宇津木) 恵, 佐々木亮平, 他. (2023). 東日本大震災被災地域の高齢者における居住形態と住環境リスクに関する観察研究: the RIAS Study, 日本公衆衛生雑誌, 70(2), 99-111.

【学会発表】

- 1) 大沼由香, 工藤美由紀, 加藤美幸, 鈴木るり子, 相澤出, 石田知世: COVID-19 流行下における地域在宅における尊厳を守るケア活動の課題, 第 25 回日本地域看護学会学術集会, 2022, 富山

■ 大沼 由香（在宅看護学領域：教授）

【著書】

- 1) 清水哲郎編集: 認知症者の最善を考える—事例で学ぶ「臨床倫理検討シート」を活用した意思決定支援 (2022). 大沼由香分担執筆: Part4 事例で学ぶ「臨床倫理検討シート」を活用した意思決定支援. 看護技術, 68, 6, 43-55.

【論文】

- 1) 佐藤喜根子, 立石和子, 大沼由香, 他 (2022): コロナ禍で実施されたオンライン (オンデマンド型) 教育の学修への影響. 日本伝統医療看護連携学会誌 13. 1. 25-33.

## 【学会発表】

- 1) 大沼由香, 加藤美幸, 太田ゆきの, 小野寺伯子. (2022): 地域包括支援センターが行う介護予防自主活動の支援構造—盛岡市の活動創出方法と継続支援, 日本老年社会科学会第 64 回大会.
- 2) 松坂美希子, 小野寺伯子, 佐藤秀樹, 大沼由香. (2022): 多職種による事例検討会での事例提供者の学び, 第 27 回日本在宅ケア学会学術集会.
- 3) 大沼由香, 工藤美由紀, 加藤美幸, 鈴木るり子, 石田千絵, 相澤出. (2022): COVID-19 流行下における地域在宅における尊厳を守るケア活動の課題, 日本地域看護学会第 25 回学術集会.
- 4) 大沼由香, 立石和子, 浦山きか, 横手裕. (2022): 看護系大学基礎教育における伝統医療倫理教育に関する展望, 第 4 回日本伝統医療看護連携学会学術大会.
- 5) 立石和子, 大沼由香, 浦山きか, 横手裕. (2022): 看護系大学基礎教育における倫理教育の実際と課題, 第 4 回日本伝統医療看護連携学会学術大会.
- 6) 工藤遥平, 松坂美希子, 千島真希, 小野寺伯子, 阿部鮎美, 大沼由香. (2022): 発達障害者の家族支援について多職種事例検討会による気づき, 第 4 回日本伝統医療看護連携学会学術大会.
- 7) 太田ゆきの, 加藤美幸, 小野寺伯子, 立石和子, 芳賀博, 大沼由香. (2022): 千歳市 A 地区介護予防自主活動の立ち上げ過程を通じたグループリーダーの認識, 第 4 回日本伝統医療看護連携学会学術大会.
- 8) 大沼由香, 太田ゆきの, 加藤美幸, 鈴木慈子, 芳賀博. (2023): 地域包括支援センターが行う介護予防自主活動の創出と継続の支援構造と課題, 第 24 回日本健康支援学会年次学術大会.
- 9) 太田ゆきの, 鈴木慈子, 芳賀博, 大沼由香. (2023): 震災復興を契機とした健康づくりのための自主活動グループの成長過程, 第 24 回日本健康支援学会年次学術大会.

## ■ 加藤 美幸 (在宅看護学領域: 助教)

### 【学会発表】

- 1) 大沼由香, 太田ゆきの, 加藤美幸, 鈴木慈子, 芳賀博. (2023): 地域包括支援センターが行う介護予防自主活動の創出と継続の支援構造と課題, 第 24 回日本健康支援学会学術集会.
- 2) 大沼由香, 工藤美由紀, 加藤美幸, 鈴木るり子, 石田知世, 相澤出. (2022): COVID-19 流行下における地域在宅における尊厳を守るケアの課題—オンライン研修会の実施から—, 第 25 回日本地域看護学会学術集会.
- 3) 大沼由香, 加藤美幸, 太田ゆきの, 小野寺伯子. (2022): 地域包括支援センターが行う介護予防自主活動の支援構造—盛岡市の活動創出方法と継続支援—, 第 64 回日本老年社会科学会学術集会.
- 4) 太田ゆきの, 加藤美幸, 小野寺伯子, 立石和子, 芳賀博, 大沼由香. (2022): 千歳



市 A 地区介護予防自主活動の立ち上げ課程を通したグループリーダーの認識，第 4 回日本伝統医療看護連携学会学術大会.

■ 太田 ゆきの（在宅看護学領域：助教）

【学会発表】

- 1) 太田ゆきの，鈴木慈子，大沼由香，他．（2023）．震災復興を契機とした健康づくりのための自主活動グループの成長過程，第 24 回日本健康支援学会年次学術大会．
- 2) 大沼由香，太田ゆきの，加藤美幸，他．（2023）．地域包括支援センターが行う介護予防自主活動の創出と継続の支援構造と課題，第 24 回日本健康支援学会年次学術大会．
- 3) 太田ゆきの，加藤美幸，大沼由香，他．（2022）．千歳市 A 地区介護予防自主活動の立ち上げ課程を通したグループリーダーの認識，第 4 回日本伝統医療看護連携学会学術大会．
- 4) 太田ゆきの，大津美香，工藤隆司，他．（2022）．帯状疱疹後神経痛患者の痛みと日常生活への影響—患者の語りから—，第 27 回日本在宅ケア学会．
- 5) 大沼由香，加藤美幸，太田ゆきの，他．（2022）．地域包括支援センターが行う介護予防自主活動の支援構造—盛岡市の活動創出方法と継続支援—，日本老年社会科学会第 64 回大会．

以上

## 【大学院】

### ■ 伊藤 收（看護管理学領域：教授）

#### 【著書】

- 1) 伊藤 收：「看護覚え書き」を中心に看護管理を論考する，ナイチンゲールのマネジメント考，ナイチンゲール生誕 200 年記念出版 「ナイチンゲールの越境 8」13-32，日本看護協会出版会，2022.

#### 【論文】

- 1) 看護師長の承認行為獲得にむけた教育プログラムの有効性の検証，佐藤奈美枝、伊藤 收，岩手医科大学看護学部紀要，2023 年 3 月 29 日刊行

以上

## 外部資金獲得状況

## 外部資金獲得状況一覧

### ・看護学部看護学科

#### 清水哲郎 (一般教養：教授)

---

1) 基盤研究(B)(代表)

課題番号：22H00602

研究課題名：臨床倫理システムの倫理的総仕上げと超高齢社会における高齢者のよい人生への貢献

#### 勝野とわ子 (老年看護学：教授)

---

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：20K10918

研究課題名：若年認知症家族介護者の経験している「慢性的悲嘆」と健康に関する研究

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K10991

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築

#### 大沼由香 (在宅看護学：教授)

---

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19725

研究課題名：地域包括支援センターが行う住民主体の介護予防活動の創出支援システムの開発

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11108

研究課題名：生活保護現業員と保健師の協働による自己効力感向上を目指したケース会議の検証

3) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：19H00515

研究課題名：アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想的な研究

## 長南幸恵 (精神看護学：准教授)

---

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：22K10819

研究課題名：ASDのある成人の感覚特性と関連する生活のしにくさの実態に関する研究

## 相澤出 (一般教養：准教授)

---

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：21K02245

研究課題名：地方女子ミッション教育の比較歴史社会学的研究

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：22K11176

研究課題名：高齢腹膜透析患者の地元暮らしを支える看護・介護チームビルディングプログラムの開発

3) 基盤研究(B)(分担)

課題番号：22H00602

研究課題名：臨床倫理システムの倫理的総仕上げと超高齢社会における高齢者のよい人生への貢献

## 下野純平 (小児看護学：准教授)

---

1) 若手研究(代表)

課題番号：21K17389

研究課題名：早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究

## 大谷良子 (母性看護学：准教授)

---

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19685

研究課題名：体外受精により妊娠した女性の妊娠・出産体験のとらえ方に関する研究

以上